

【研究ノート】

プロダクトデザインの授業における試み（下）
—豊かさを再認識するためのテーマ設定を通して—

笹 川 寛 司*

An Experiment of Teaching about Product Design (Part 2)
— Through the Theme Setting for Appreciating the Essence of Happiness —

Hiroshi SASAGAWA

Abstract

In the field of product design, is it possible to find different values, rather than creating new shapes intended to be consumed? In an attempt to address this question, the author conducted classes during the 2006 semester using the “Stop at the place and observe the feet well” method. Since then, I have been conducting classes with the same content for about 10 years. In this paper, by reviewing a series of lessons, I will explain the contents of the classes in detail along with works produced by the students. Finally, I will describe the influence of this class on my students.

はじめに

前稿「プロダクトデザインの授業における試み（上）」では、テーマ設定の背景となったバヌアツ共和国に関するランキング結果について触れ、「豊かさを再認識する」というテーマに至った経緯についての説明を述べた後、ゼミナール形式で行われた授業での詳細な内容と学生作品の解説を行った。

本稿「プロダクトデザインの授業における試み（下）」では、既述のゼミナール運営で得られた知見をもとにしてその後継続的に実施してきている演習系授業「製品デザイン1・プロダクトデザインA」に関する説明を行うとともに、学生作品をまとめた小冊子のタイトルとして用いているキーワード「パンのみみ」についても具体的な解説をする。最終的には本研究ノート（上・下）のまとめとして、本授業を受講した学生がその後の創作活動にて同様のテーマを発展させ、全国規模のコンペティションで評価されたことに触れることにより、「豊かさを再

*国際文化学部 デザイン文化学科

認識する」テーマ設定における教育的意義について考察を行う。

3. 2008年度から2017年度までの授業

2008年度から昨年度（2017年度）までに行ってきた同内容の授業について、開講セメスター・授業名・対象学年・受講した学生数・授業を行ったキャンパスを（表1）に示す。¹

回数	開講年度	セメスター	授業名	対象学年	受講者数	開講キャンパス
1	2006年度（平成18年度）	秋	「ゼミナール」	3年生	9名	旭川キャンパス
2	2008年度（平成20年度）	春	「製品デザイン1」	3年生	43名	旭川キャンパス
3	2009年度（平成21年度）	春	「製品デザイン1」	3年生	43名	旭川キャンパス
4	2010年度（平成22年度）	春	「製品デザイン1」	3年生	26名	旭川キャンパス
5	2011年度（平成23年度）	春	「製品デザイン1」	3年生	21名	旭川キャンパス
6	2012年度（平成24年度）	春	「製品デザイン1」	3年生	26名	旭川キャンパス
7	2013年度（平成25年度）	春	「製品デザイン1」	3年生	12名	旭川キャンパス
8	2013年度（平成25年度）	秋	「プロダクトデザインA」	2年生	19名	札幌キャンパス
9	2014年度（平成26年度）	秋	「プロダクトデザインA」	2年生	23名	札幌キャンパス
10	2015年度（平成27年度）	秋	「プロダクトデザインA」	2年生	20名	札幌キャンパス
11	2016年度（平成28年度）	秋	「プロダクトデザインA」	2年生	15名	札幌キャンパス
12	2017年度（平成29年度）	秋	「プロダクトデザインA」	2年生	8名	札幌キャンパス

表1 授業一覧

3-1. 製品デザイン1・プロダクトデザインA

前稿（上）で述べた2006年度のゼミナールの後、一年の間を空けることとなったが、2008年度より主要な内容を踏襲した上で、授業「製品デザイン1」をスタートした。これは、ゼミナールの学生作品を展示・公表した際に一定の評価が得られたことによる。ゼミナールと通常の演習系授業とでは授業形態が異なるために若干の修正を加える必要はあったが、ゼミナールの主要な構成要素はうまく取り入れることができた。その後も毎回内容に微調整を加えながら、昨年度（2017年度）まで同テーマによる演習系授業として継続的に行ってきた。尚、本稿執筆中の今年度（2018年度）においては、13回目の授業「プロダクトデザインA」が進行中である。途中、旭川キャンパスの募集停止と札幌キャンパスの新学科設立に伴い、授業名は「プロダクトデザインA」へと変更されたが、テーマ自体は変更することなく開講してきた。10年以上の長期間、テーマ変更の必要性に迫られなかった理由は、「豊かさ」や「幸せ」に対する日本人の関心が年々高まる傾向にあったからである。

前稿（上）で述べたように、2006年7月、英国のシンクタンク・ニューエコノミックス財団が「世界で最も地球にやさしく幸せに暮らす国ランキング」において、1位がバヌアツ共和国であるとの発表を行った。この発表の後、国連をはじめとする様々な機関が後を追うようにして「幸福度」「豊かさ」「いちばん幸せ」などのキーワードを冠して数多くのランキング結果を発表するようになった。調査時期や調査項目によってランキング結果は異なるが、フィンラン

ドやノルウェーなどの北欧諸国、国王夫妻の来日でも話題となったブータン王国、ラテンアメリカのコスタリカ共和国などがランキング上位として報道された。そして、私たちはランキングの根拠となった各国のデータや特徴を知らされる度に、そもそも「豊かさ」とは何なのか？「幸せ」とは何なのか？ということについて日本とランキング上位国とを比較しながら考えるようになった。ここ10年でこの種のランキングのメディア露出が以前より増えたのは、国民の関心の増加と比例しているのだろう。未来の予測が難しい世の中において、次の一步を踏み出すために自分とは異なる価値観を参考にしたいという心理が日本人に働いたように思える。日本社会に蔓延しているこうした空気が「豊かさを再認識するためのテーマ設定」を継続させていくことに繋がった。

3-2. 主な作品

毎回新しい作品を生み出し続けていかなければならないという観点においては、長期に渡って同テーマを掲げることにはある種の心配があった。同様の問いかけを学生たちに繰り返す内に、それまでとは異なった「気付き」が発見できなくなり、そのことによって新しい作品が生まれなくなってしまうのではないかという心配である。しかし昨年度まで、毎回異なる「気付き」が発見され続けているし、むしろ似通った作品が提案されることの方がはるかに少ない。アイデアの素が潤沢であるということは、私たちの日常生活の中に「懐かしい幸せ」、「忘れかけている幸せ」、「ちょっとした幸せ」がいかにたくさん潜んでいるかを証明するものである。

今日まで、260名を超える学生たちが日常における「気付き」をもとにしてオリジナリティーの高い作品を制作してきた。その中からいくつかの作品を以下に紹介したい。

【気温（数字）を食べ物であらわした温度計】（図1）

デザイン：軸原 将寛／東海大学 芸術工学部 建築・環境デザイン学科4年次（2010年度）



図1. 気温（数字）を食べ物であらわした温度計

「季節を感じる」ことに注目した作品。

農業技術の進歩とともに、季節に関係なく様々な食べ物が一年中いつでも食べられるようになったが、それでもやはり季節にマッチしたものは美味しく感じる。温度変化と食べ物との繋がりを再確認するために、気温（数字）を食べ物で表現した温度計を作ってみた。

【時計の目隠し】（図2）

デザイン：宮崎 眞吾／東海大学 芸術工学部 くらしデザイン学科3年次（2012年度）

「ゆっくりと食事をする」ことに注目した作品。

時間の流れがどんどん早くなり、様々な案件に追い立てられながら生活することが増えると、食事の時間すら削られるようになる。時計を睨んで、次の予定にソワソワしながら食事するのはいかがなものか。このプロダクトは、ゆっくりと食事をするのがいかに貴重なことなのかを教えてくれる。



図2. 時計の目隠し

【オムライスの落書き帳】（図3）

デザイン：東 くるみ／東海大学 国際文化学部 デザイン文化学科2年次（2014年度）

「想いを伝える」ことに注目した作品。

オムライスを作った母親が、仕上げとして家族に向けてケチャップでメッセージを添える。恋人同士ということもあるだろうし、夫婦間ということもあるだろう。そこには、ケチャップによる「味付け」や「彩り」とは全く異なる大切な要素が含まれている。



図3. オムライスの落書き帳

【カメラ用の穴がないスマホケース】（図4）

デザイン：島津 知里／東海大学 国際文化学部 デザイン文化学科 3 年次（2016 年度）

「スマホで食べ物の写真を撮る」ことに注目した作品。

最近では、スマホで食べ物の写真を撮ることがすっかりふつうのことになった。五感を総動員して目の前の食べ物を味わうことが本来の目的であったはずなのに、今では写真写りの良し悪しに気を取られ、さらに SNS へのアップロードが何よりも優先される。カメラ用の穴が塞がっているスマホケースは私たちに何を気付かせてくれるのだろうか。



図4. カメラ用の穴がないスマホケース

3-3. 小冊子のタイトル「パンのみみ」

第一回目のゼミナールを終えた後、まとめの小冊子を作したことは前稿（上）でも少し触れた。一冊に12作品を掲載し、「パンのみみ」と名付けた手取り易い130mm×130mm正方形のサイズの小冊子である。ネーミングの由来については、小冊子の冒頭部分に簡単な説明を記載していたのでそこから以下に引用する。『近年、僕たちの多くは「幸せ」を求める矛先を食パンのやわらかい真ん中部分、つまり「物質社会がもたらす幸せ」の中だけに、安易に求め過ぎているような気がしてならない。その結果、より味わい深い「パンのみみ」は皿の上に食べ残され、忘れられていく。しかし、その「パンのみみ」が食パンの中心部分を支えるためになくてはならない部分であることは事実であり、「パンのみみ」のない食パンは何とも味気ない、深みのない食べ物になり変わってしまうのではないだろうか。』

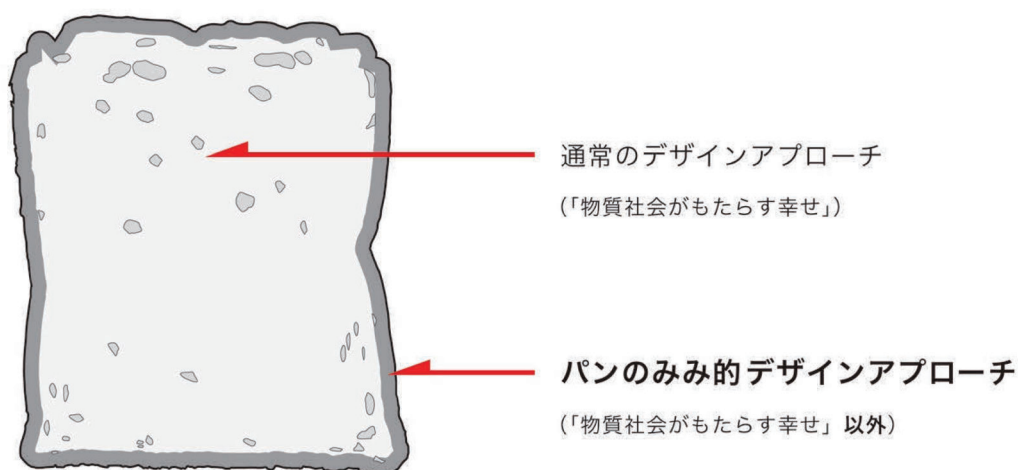


図5. 豊かさ（食パン）を再認識する

（図5）に示すように、「通常のデザインアプローチ」と「パンのみみのデザインアプローチ」という2つのキーワードを加えてさらに説明を試みる。「通常のデザインアプローチ」とは、現代でよく知られたデザインアプローチのことであり、私たちは一般的にはこの分野でデザインされたモノを手にすることによって、物質的・経済的な豊かさを得ている。これに対して「パンのみみのデザインアプローチ」とは、本稿の中で取り上げているデザイン手法を指すキーワードであり、“より広いデザインの可能性”に目を向けることを指す。こちらで生み出されるモノは、必ずしも値段が設定され売り買いされるモノだけを対象としているわけではなく、そのモノを介してユーザーにメッセージが伝わったりするような、人々の心の豊かさに影響を与えられるモノのことである。

既述したようにパンのみみは飽食の中、忘れられる傾向にある。しかし、食パンの「中心部分」と「みみ部分」の両方が揃ってこそ、食パンは食パンとして人々に認識される。同じく、真の豊かさも「通常のデザインアプローチ」から生み出されるモノと「パンのみみのデザインアプローチ」から生み出されるモノの両方の調和がとれてこそ、初めて正確に認識がされるのではないだろうか。

3-4. 小冊子の表紙

2008年度から同テーマで授業を行うようになってからも、継続して一年に約一冊ずつまとめの小冊子を制作してきた（図6）。一冊に12作品ずつ紹介しているので、これまでの9冊の「パンのみみ」の中には108個の異なる気付きをもとにした作品を掲載したことになる。表紙デザインは、編集担当の学生がタイトルである「パンのみみ」をモチーフにして毎回趣向を凝らしてくれたものである。覚えやすく親しみの持てるタイトルと若者らしい潤いのある表紙デザインは、人々がこの小冊子を手に取り易くすることに一役買ってくれた。

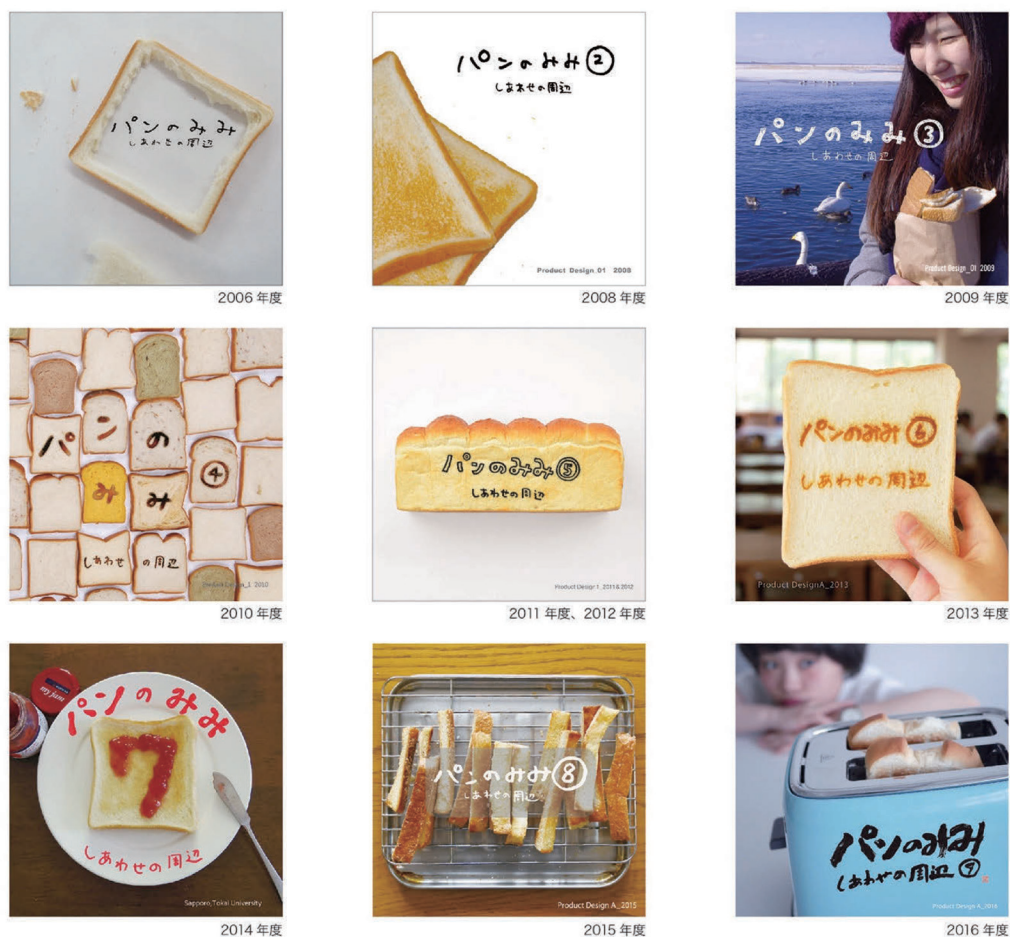


図6. 小冊子（パンのみみ）の表紙

4. 本授業が学生に与えた影響

最後に、ある学生が本授業の受講後にデザインしたレシートを紹介し、本授業が学生に与えた影響について考察してみる。

（図7）は、2014年度に「プロダクトデザインA」を受講した女子学生²が、その後別の授業

内³でデザインした「縦書きレシート」という作品である。その授業では、各学生にそれまでの学びを実践することを目的として学外のデザインコンペティションに作品応募することを課していた。彼女は、買い物の時に受け取るあの何の変哲も無いレシートをデザインの対象として自ら選び、通常の横書きを縦書きに置き換えるというアイデアによって「Tokyo Midtown Award 2015」で入賞⁴を果たした。ちなみに、この時のコンペティションにおける共通テーマは「おもてなし」である。

レシートはデザイン対象としてはあまりにも地味すぎるし、「縦書きレシート」に関しては最終的にレシートの色や形に変化を与えることによって現代的なルックを作り出したわけでもないので、一般的には「これはデザインなのか？」と思われてしまうかも知れない。しかし、彼女は本授業を受講し、デザインをより広い可能性を持つ行為として捉える体験をあらかじめしておいたからこそ、数あるデザイン対象物の中からレシートを選ぶことに躊躇はなく、さらにそこに新しい「おもてなし」の工夫を施すことで優れたデザイン提案にたどり着くことができたのだ。物質的な豊かさからかけ離れているレシートをデザインの対象としてチョイスし、さらにそのレシートをつぶさに観察することによってそこに新しい価値を見出そうと試みたこの「縦書きレシート」

は、「パンのみみのアプローチ」が学生に与えた影響を証明する好例となった。

当コンペティションの審査員によるこの作品の評価は「審査員特別賞」であったのだが、展示会場で行われた一般来場者による投票では、受賞8作品の中で最多得票数を獲得し、みごと「東京ミッドタウン・オーディエンス賞」も合わせて受賞することとなった。前述のとおりレシートとは、私たちの日常生活に当たり前のように存在するありふれたモノであり、所有することで喜びを得られるようなモノでは全くないが、多くの一般オーディエンスがこの小さな紙切れに心を動かされたということは、人々の豊かさに対する認識に変化が起きていることを示している。



図7. 「縦書きレシート」

5. まとめ

本稿の鍵となった「豊かさを再認識する」ことに深く関連するトピックとして、深澤直人⁵氏の2011年旭川での対談記録から彼の発言を以下に引用する。⁶『私たちは今「人間にとって何が適正か」を急激に学んでいる。（中略）「もとに戻んなきゃ」と。適正を超えてバランスを崩してはじめて適正かわかるようになる。ダイヤルを回してちょうどいい位置を見つけるには最初に回しすぎてから少し戻さないとわからない。上げすぎてたボリュームを、いいチューニングに戻さなきゃ。戻すことは後退ではなく、ボリューム上げすぎたから、少し戻して、あ、このくらいの方がいいなって気付くんじゃないでしょうか。その適正を示すことが、デザインなんだと思います。』〔深澤直人 2011 70頁〕身の回りがモノで満たされ、右肩上がりの経済成長があまりのぞめなくなった現代というのは、つまりツマミの赤い印が適正值（ちょうど良いところ）をすでに通り過ぎてている状態だと言える（図8）。私たちはこれまで、適正值を求めてボリュームをやみくもに大きくしてみたが、それを続けていっても世の中を居心地良くすることには繋がらないということになんとか気が付き始めた。

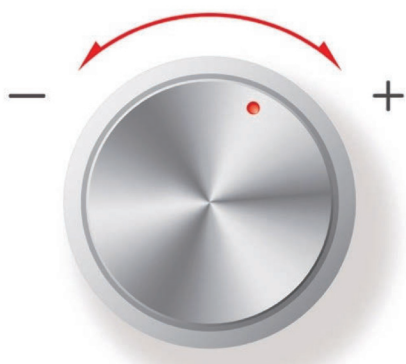


図8. 「IFDA ASAHIKAWA 2011 ガイドブック」の対談記事を参照して描いた図

本稿を通して提案したかったことは、バスマツの人たちの生活を手本にして、昔の貧しい時代の日本に戻りましょうということではないし、デザイン手法をすべて「パンのみみデザインアプローチ」に切り替えましょうということでももちろんない。大切なポイントは、放っておくとすぐに肥大化してしまう食パンの「中心部分」と、逆に縮小してしまう「みみ部分」のバランスを意識的にとらなくてはならないということである。

食べるものに事欠くような時代から世の中が徐々にモノで満たされていくまでの過程においては、食パンは「中心部分」と「みみ部分」のバランスを欠くことなく健康的なプロポーションを維持したまま成長していくことができた。人々は、豊かになっていくその一步一步をしっかりと認識しながらゆっくりと前進してきた。（今思うと、この頃がボリュームの「適正值」にもっとも近づいた時かもしれない。）しばらくすると、日本は経済的・物質的な面で絶頂期を迎え“豊かな”国となるが、その後食パンの内と外のプロポーションはいびつになり始める。人々の際限のない欲望に応えるかのように「中心部分」はますます大きくなり、それに伴って「みみ部分」が端っこに押しやられるようになった。（この頃には、ボリュームは「適正值」をはるかに超えていたと思われるが、ボリュームを下げるという選択肢はなかった。）

デザインとは本来、人々を文化レベルの高い成熟した世界へと導いていく使命を持っているはずであり、つまりそれが深澤氏の言うところの「適性を示すこと」であるが、特に近代デザ

インにおいては、デザインと経済活動との結び付きが強くなり過ぎたために豊かさのあるべき姿についてゆっくりと考える時間がなくなってしまったのが現代であろう。

このような時代の中でデザイン教育が行うべきことは何かについて考え10年以上に渡って実践してきた教育から得られた成果を本研究ノートにまとめた。バヌアツ共和国のランキング結果に端を発し、豊かさに対する価値観の転換期におけるデザインのあり方について考察を行ってきた。デザインを学び始めたばかりの学生たちが、「豊かさを再認識する」ことをテーマとして掲げる本授業を経験することによってデザインについての理解をさらに深めることができたはずである。そのことは、授業成果からも十分読み取ることができたとし、「縦置きレシート」が高い評価を得たことは本テーマ設定による教育効果をはっきりと証明することに繋がった。

註

- ¹ 2009年度、2010年度、2011年度は教員2名体制（国際文化学部 デザイン文化学科 中尾紀行教授）で運営した。
- ² 吉田 茉莉／東海大学 国際文化学部 デザイン文化学科3年次（2015年度）。
- ³ 2015年度 春semester「ゼミナール」にて。
- ⁴ 審査員特別賞（水野学賞）を受賞。
- ⁵ プロダクトデザイナー、多摩美術大学統合デザイン学科教授
- ⁶ 「東日本大震災後、人間が自然の脅威やそれとの共存を忘れやすい」という話の後半部分で、経済社会におけるものづくりのバランスについて触れている。

参考文献

- 朝日新聞 2006「地球にやさしく幸せに暮らす国」『朝日新聞 朝刊』（2006年7月29日）朝日新聞社
 朝日新聞 2017「『経済成長』永遠なのか」『朝日新聞 朝刊』（2017年1月4日）朝日新聞社
 原研哉ゼミ 2005『Ex-formation 四万十川』中央公論新社
 深澤直人 2011「織田憲嗣×深澤直人 ロングインタビュー」『IFDA ASAHIKAWA 2011 ガイドブック』国際家具デザインフェア旭川開催委員会、70頁
 マテリアルワールド・プロジェクト、ピーター・メンツェル 1994『地球家族 世界30か国のふつうの暮らし』TOTO出版
 D・H・メドウズ、D・L・メドウズ、J・ラーンダズ、W・W・ベアランズ三世 1972『成長の限界 ローマ・クラブ「人類の危機」レポート』ダイヤモンド社